

谷口史郎氏

「今治タオル技能士会」相談役、初代タオルマイスター

約半世紀にわたりタオルづくりの第一線で活躍し、製織技術において今治タオル業界内の評価は非常に高い。現役時代の技術的能力の高さはもちろんであるが、業界の技術伝承、後進の技術指導・育成でも多大な貢献を果たしている。1991年廃止の国家技能検定に代わる厚生労働省認定社内技能検定制度の創設に向けてリーダーシップを発揮し、また業界の国家技能検定1級



谷口史郎氏

取得者で構成する「今治タオル技能士会」の会長を務め、さらに「今治タオルプロジェクト」の一環で設けられたタオルマイスター制度において2008年に初代タオルマイスターにも任命された。今回の「タオルびと」は、今治屈指の製織技術者を取り上げる。



たにぐち・しろう ☆ 1943年8月、今治市馬越町生まれ。5人兄妹の末っ子。今治市立日高小学校、今治市立日高中学校（現・西中学校）をへて、愛媛県立今治工業高等学校工業化学科に進学。高校卒業後、富士インキ工業（株）に勤務。1966年に同社を退職して帰郷し、製織技術者として南海タオル工場に入社。同社の工場閉鎖にともない、1986年に（株）オリムに入り、高度な製織技術を必要とする数多くのタオル製品を開発。1991年国家技能検定1級合格、2006年今治タオル技能士会会長就任、2008年初代タオルマイスター認定、2014年全国技能士会連合会功労表彰受賞。そして現在も後進の育成・指導に奮励している。

1. 幼・少年時代

2 歳のときの今治空襲はいまも鮮明に覚えている

1943年8月18日、谷口史郎氏は、父・鹿市^{しかいち}氏と母・千代氏との間に今治市馬越町で生まれた。上から順に長女、次女、三女、長男があり、谷口氏は5人兄妹の末っ子である。谷口氏は父親が50歳のときの子どもで、一番上の長女・ヒデミ氏とは16歳離れており、ヒデミ氏の長男の渡部裕明氏とは兄弟のように育ち、子どもの頃から仲が良かった。

鹿市氏は、晒し場の仕事をして生計を立て、母親は綿布の「伸べ巻き」の仕事に従事し、共働きだった。谷口氏の生まれた1943年は日本が戦争の真っ只中であり、谷口氏が2歳のときに今治に悲劇が襲った。1945年4月26日、5月8日、8月5日～6日の3度にわたる米軍による空襲で、市内の約8割を焼失、約600人の犠牲者を出した。谷口氏は、母親に連れられて家の近くの鯨山古墳の下にあった防空壕に駆け込み難を逃れたが、変わり果てた今治の風景は、2歳の幼児に強烈な印象を残した。谷口氏いわく、「その他のことは何も覚えていないのに、あの焼け野原だけは今でも頭のなかにあるんですよ。」3度目の今治空襲の約10日後、日本の降伏により長い戦争に終止符が打たれた。平和な時代がようやくやって来た。

もう一つ、幼かった谷口氏の脳裏に焼き付いて離れない怖い記憶がある。1946年12月21日に発生した南海地震^{南海地震}である。家が大きく揺れたので、母親が布団のなかに入れてあった行火^{あんか}と谷口



谷口氏の小学校時代

谷口氏（左）、渡部裕明氏（右）

氏を抱えて外に非難すると、近所の人たちも集まっていた光景をいまだに覚えている。

7歳に成長した谷口氏は、1950年に今治市立日高小学校に入学した。放課後になるといつも友だちと遊ぶ元気な少年であり、夏には毎日のように川に行き、川で遊ぶうちに自然と泳ぎを覚えた。川で採ったドジョウをカゴのなかに入れて一晩川底に置き、天然のうなぎを捕まえて喜んでいたことは懐かしい思い出である。一方、農繁期になると学校が休みになり、農家の子供たちは田植えや稲刈りの手伝いをした。「米は一粒でも無駄にしてはいけない。米一粒でも1年手間をかけて作ったものだからね」と両親から口を酸っぱくして言われた。

小学校を卒業した谷口氏は、今治市立日高中学校（現・西中学校）で学び、野球と出会った。入学した年に日高中学校に野球部が発足したため、本格的に野球の練習を始めたのは夏休みからだった。野球部ではサードとして活躍し、今治市秋の新人大会では決勝戦まで勝ち進み、今治市立桜井中学校と12回延長の末、1対1の引き分けとなった。その結果、両校の選手にメダルが授与され、優勝旗は半年ずつ交替で両校が持つことに決まった。こうして、白球を追いかける野球が谷口氏の人生における趣味となった。

小さい頃からモノづくりが大好きだった谷口氏は、将来何かをつくる仕事に就こうと漠然とおもっていた。そして1959年、愛媛県立今治工業高等学校に進み、工業化学科に所属し、エネルギーや石油化学など化学工業分野の基礎と応用を学んだ。

高校時代に印象に残っているのは、修学旅行と少林寺拳法である。



日高中学校時代

優勝旗を手にしている谷口氏

修学旅行は、1960年10月12日から夜行列車に乗って鎌倉、東京、日光を巡る3泊4日の旅であり、工業高校らしいのは羽田空港が旅程に入っていたことである。当時は新幹線もまだ開通しておらず、乗り物の花形は何と言っても飛行機だった。

鎌倉から東京に向かう観光バスのなかで流れていたニュースは谷口氏にとってあまりにも衝撃的であり、修学旅行の思い出のひとつである。旅程に入っていた国会議事堂見学が中止になったほどの出来事が東京で起こ




修学旅行で行った羽田空港をバックに

左から2番目が谷口氏




今治工業高等学校時代

っていた。そのニュースとは、日本社会党委員長の浅沼稻次郎  が日比谷公会堂で演説していたところ、17歳の右翼少年・山口 おとや 二矢に暗殺されるという事件であった。おなじ17歳の少年が起こした事件は、谷口氏にとって大きなショックだった。国会議事堂周辺には警察官が包囲しており、結局国会議事堂見学は断念せざるを得なかったが、今治からやって来た青年にとって十分な東京見聞となった。

高校時代に新しいスポーツにも挑戦した。中学時代に野球一筋だった谷口氏は、友人の誘いで少林寺拳法部に入部した。「何でもトライして、それを楽しむ」という精神は、少年時代からのものである。

2. 高校卒業後から(株)オリム入社までの経緯

おいしい空気と水のあるところで暮らしたい、これが帰今の理由だった

高校を卒業後、谷口氏は大阪の富士インキ工業(株)  に技術者として入社した。時代は高度成長期にあって、日本の若者はますます都会に吸い寄せられていった。谷口氏もそのひとりであり、身軽





富士インキ工業時代も
ピッチャーとして活躍

な農家の次男で都会への憧れもあって大阪への就職を決めた。時代的に、ほぼ集団就職に近かった。富士インキ工業は、印刷用インキを製造するメーカーであり、当時はモノを包装する袋にビニールやナイロン、ポリエチレン、セロファンなど新しい素材が次々と生まれ、これらの素材に適合するインキを開発していた。谷口氏は、顔料と接着剤を調合する技術職として働いた。

追い風となったのがインスタントラーメンのヒットである。インスタントラーメンの容器に合った速乾性の高い印刷インキが開発され、これを契機に会社は工場を拡張し量産体制に入った。会社の売上はうなぎ上りに増加していったが、従業員の仕事は多忙を極めた。

谷口氏にとって何よりの楽しみが野球だった。野球好きの谷口氏は、社内の軟式野球チームに入り、ピッチャーとして活躍した。入部後にピッチャーとして練習を重ね、1年後には試合に勝てるまでに上達した。忙しい毎日のなかであっても、仲間と一緒に楽しい時間を過ごした。学生時代から始めた野球をとおして、人と人との繋がりがりや助け合いの精神、人あっての自分など、数多くのことを教えられた。「わたしは個人プレーのスポーツより、団体とするスポーツ

の方が好きです」というところに、谷口氏の人柄がにじみ出ている。

大阪での都会暮らしは4年間つづいた。騒がしくも平和な日々を送っていたある日、ふと、都会のどんより曇った空が目に入り、このとき谷口氏は思った。「おいしい空気と水のあるところで暮らしたいな。一生ここでは暮らせないな。今治に帰ろう。」これが谷口氏の帰今の理由であった。谷口氏が住んでいた東淀川区は工場が乱立しており、汚水や排ガスの規制がない時代に、工場からの廃液や煙突からの煤煙などが四六時中放出され、毎日がいまにも雨が降りそうなどんよりした空の色だった。光化学スモッグ  による農作物への被害が報告されるようになったのも1960年代の半ば頃である。高度成長期における都市のみならず各地域の公害問題は、社会的な問題に発展しており、事実、1967年の公害対策基本法  成立もその証である。

帰今すると、周りはタオル関係者で街は活気に溢れていた

1966年4月、帰今した谷口氏がすぐにトライしたのは、運転免許取得だった。「これからは車社会になる」と、ずっと以前から切望していたことであり、ようやくその夢は叶った。谷口氏のなかでは、大阪にいた時代とまったく違う、ゆっくりとした時間が流れていった。しかし、一歩家の外に出ると、1960年に日本一のタオル生産高を達成した今治では、タオルづくりに猫の手も借りたいほど多忙な人びとで活気に溢れていた。街を歩けば出くわす人のほとんどがタオル関係者であり、谷口氏の身近では実姉のヒデミ氏もその夫の渡部氏もタオル関係者であった。渡部氏は、老舗タオルメーカーの楠橋紋織(株)に勤めていたが、退職後、独立して南海タオル工場を経営し、ヒデミ氏も工場を手伝っていた。このような状況のなかで、谷口氏がタオルに係わる仕事に就くまでそう時間はかからなかった。

実姉の勤務先の南海タオル工場では、製織技術者が足りず困っていた。そこで、大阪から帰今し、しばらくのんびりしていた谷口氏

に実姉から声が掛かり、技術者としてのキャリアが買われて南海タオルにすぐさま入社した。帰今してから半年ほど経った1966年10月のことである。南海タオル工場では、ジャカード機2台、ドビー機8台の合計10台の織機が設置してあり、当時はシャトル織機が主流であった。シャトル織機を使って製織する場合、糸切れには細心の注意が必要とされた。これを怠るとB級品になってしまい、タオルの品質が格段に低下した。技術者の腕の良し悪しは、このシャトル織機の操作具合によって決まった時代である。

何も知らずにタオル業界に飛び込んだ谷口氏は、とにかくタオル織機について貪欲に学んだ。タオル織機の構造、パイルのできる仕組み、地織のできる仕組み、上糸・下糸のテンションの違い、開口、箆打ち、緯入れなど覚えなければならないことは山ほどあり、上司には「仕事は人がやっていることを見て覚えるものだ」と言われ、先輩技術者のやっていることを懸命に観察した。と同時に、上司であろうが同僚であろうが、質問できる人にはどこでも何でも聞いた。今治の織機を修理していた鉄工所に行くと他のタオル工場の技術者がおり、そこでもわからないことを聞いて教えてもらった。タオル織機の理屈がわかってくると、それまで以上に面白くなってもっと多くのことを覚えた。

南海タオル工場に入社して1年が経過した頃、先輩の技術者が退社し、谷口氏は急ぎよその穴埋めに織機の調整などを任されるようになった。退社した先輩からは、「古い織機の回転している箇所は、毎日油を差してあげなければならない。油を差していたら、その織機の調子がわかるものだ」と言われていたので、毎日油を差しながら、摩耗している箇所があるか否か、油切れしていて熱を持っているか否か、変な音がしているか否かなど細心の注意を払ってメンテナンスをした。鋳物製の古い織機は、よく折れたり、摩耗したりしていたが、その都度、鉄工所で溶接をしてもらったり、施盤で削ってもらったり、部品を新しく作ってもらったり、子どもを育てるように手間と時間をかけて織機の調整をした。こうして、谷口氏は、

勤勉実直に技術を修得し、やがて南海タオル工場で一人前の技術者となっていた。

プライベートでは、1969年12月、谷口氏が26歳のときに伊予三島生まれで今治市内に住んでいた照子氏と見合結婚した。照子氏は、短期大学を卒業後、栄養士として働いていた。新婚旅行は当時のハネムーンのメッカである宮崎・鹿児島だった。そして、翌年の1970年に長男の真也氏、1973年に長女の香織氏が誕生し、二人の子どもにも恵まれ、ますます仕事に気合いが入った。



新婚旅行で行った開開岳をバックに

1971年に全国でタオルの技能検定（1・2級）が始まり、谷口氏は1973年に2級を受験することになった。いきなり1級をねらうには現場での経験が足りなかったため、まずは2級からの挑戦だった。技能検定は実技と学科の2つの試験があり、両方に合格しなければならない。実技試験は、初めての左ハンドルの遠州織機の操作だった。友人のタオル工場におなじ型の遠州織機があったので、それを借りて練習をさせてもらい事前に対策を練ってはいたものの、試験当日は検定員が見守るなかで汗びっしょりで手も震える始末だった。しかし、どうにか実技試験は合格した。一方の学科試験は、まず講習会を受け、そこで出題される問題について学習し、さらに家に持ち帰って復習をする作業を何回か繰返した。今まで聞いたことのない繊維関連の専門用語や問題の羅列であったが、何はともあれがむしゃらに覚えた。仕事との両立は厳しかったが、学科試験も無事に合格した。

南海タオル工場の閉鎖

谷口氏が検定試験に合格した頃、南海タオル工場ではフェイスタオルやバスタオル、おしぼりなどを主力商品として、親会社の越智タオルに商品を納入していた。いかに良い商品をなるべく早期に納品できるかが下請のタオル工場にとって他社との差別化になるため、日曜日以外の週6日、早朝から夜遅くまで工場で織機を動かしていた。

1970年代は新しい織機が登場した時代であったが、南海タオル工場では既存のシャトル織機を改造したり、他の工場で使われていた古い織機を購入し手を加えたりして生産量を増やしていた。たとえば、緯糸がなくなる前に織機を止める林フィラーの光電管を取り付け、従来、一人の技術者が2、3台の織機を操作するのが通常だったところ4台にまで増やした。こうした改良作業は、技術者である谷口氏が主導した。

南海タオル工場の経営は順調だったが、1981年に経営上の事情から渡部タオル工場に改称された。しかし、親会社の越智タオルが倒産し、しかも保証人になっていた関係ですべての財産を没収されてしまい、1986年4月に谷口氏がタオル技術者としてキャリアを積んだタオル工場は、惜しくも今治から姿を消した。

「捨てる神あれば拾う神あり」である。当時、渡部タオル工場が下請をしていた平林タオル（株）の専務だった平林元樹氏が最新型の機械を設備したタオル工場を新しく創設するということで、技術者として谷口氏に声が掛かった。そして、同年5月の（株）オリム設立と同時に入社し、7月から同社の製織技術者として本格的に活動を開始した。（次号につづく）

